

ドイツ・ノルトライン＝ヴェストファーレン州に おける社会民主党

—— 伝統的牙城にみる「赤と緑」の実験の頃の党内政策過程 ——

小 野 一

Die SPD in der Hochburg

—— Eine Dokumentation über die innerparteilichen Politiken der nordrhein-westfälischen SPD im Zusammenhang mit dem rot-grünen Experiment ——

ONO Hajime

Nordrhein-Westfalen (NRW) ist eine traditionelle Hochburg der Arbeiterbewegung und die dortige SPD hat von 1980 bis 1995 eine absolute Mehrheit genossen. Im Gegensatz zu Hessen, wo die post-materialistisch orientierten SPD-Linken für eine Zusammenarbeit mit den Grünen große Rolle gespielt haben, waren die konservativen Sozialdemokraten Nordrhein-Westfalens zum Rot-Grün skeptisch und versuchten, die Modernisierungspolitiken durch eine Selbsterneuerung ihrer Regierungspartei durchzusetzen. Um die Besonderheit der Reformpolitiken der NRW-SPD zu erklären, behandelt der Verfasser drei Themen; die innerparteiliche Situation nach der Bundestagswahl 1987, die Energie- bzw. Atompolitik und die Parteireform in den 90er Jahren. Anhand der vergleichenden Studie über die politischen Prozesse in der hessischen und nordrhein-westfälischen SPD können wir unsere Erkenntnisse über das rot-grüne Experiment noch vertiefen.

「赤と緑」のパイオニア・ランドとなったヘッセン州とは対照的に、社会民主党（SPD）の伝統的牙城ノルトライン＝ヴェストファーレン州（以下NRWと略記）では緑の党との連立は問題にならなかった。それどころか同州は、党内におけるエコロジー思考の高揚やヘッセンでの展開もにらみながら、赤緑連合路線に反対する党内保守派の拠点となった感がある⁽¹⁾。両州の比較研究は「赤と緑」の実験の意味内容をより明確にする上で有益だが、本稿は、前回の論稿（『研究論叢』39－2）とあわせ、その準備作業をなすものである。

1. ノルトライン＝ヴェストファーレン州SPDの概要

1.1. 略歴

NRWは、人口1770万（20%強）でドイツ最大の州である。同州のSPDは4つの地区組織（Bezirk）からなっていたが⁽²⁾、2001年12月にひとつに統合された。石炭・鉄鋼産業の一大中心地ルール工業地帯を擁する同州では、組織された産業労働者の間での安定した支持基盤を背景に、1980年から95年まではSPDが単独過半数を制していた⁽³⁾。

それに加えて同州の緑の党が当時はまだラディカルな地方組織の部類に属していたこともあって⁽⁴⁾、同州では赤緑連合など問題になり得なかった。両党の支持者や活動家の社会的構成や政治的選好は全く異なる。SPDの支持基盤をなす産業労働者は伝統主義的・保守的傾向を示し、緑の党が掲げる生活の質や環境保護といった問題には関心が低い。エコロジー対策が雇用確保とトレード・オフの関係にあると考えられる場合は、なおさらである。そのため、ルール工業地帯における両党間関係は、とりわけ陰悪なものだった⁽⁵⁾。

とはいえ、伝統的工業地帯も時代の変化と無関係ではいられない。90年代のSPDは内部にふたつの異なった政治的潮流を抱えていたといわれる。ひとつは、労働組合に組織された伝統的支持者層であり、もうひとつは、新中間層・高学歴層に基礎を置きエコロジー的価値を志向する改革派グループである。ルール工業地帯では前者が主導権を握っていたため、SPDは、数の上でも重要性を増す新興勢力や新しい政治文化との接点を失っていった。石炭・鉄鋼といった斜陽産業から未来型産業へとシフトするなら、党はその支持者を失うというジレンマに、NRWのSPDは苦しんだのである⁽⁶⁾。

このジレンマが臨界点に達したのが、95年のNRW州議会選挙である。SPDは人気の高いヨハネス・ラオ候補の下、最後まで連合パートナーを明言せずに選挙を戦ったが、単独過半数を維持できなかった。今回大量の棄権票が出たことは、とりわけSPDに不利に作用した⁽⁷⁾。選挙後、連立パートナーをめぐるSPDは大いに揺れたが、結局赤緑連合政権が成立した。その際、褐炭プロジェクト・ガルトツヴァイラーⅡは、雇用、エネルギー、環境などの問題が絡み合った、シンボリック問題だった⁽⁸⁾。

1.2. 問題の所在

社会民主主義の伝統的な方向性と新しい政治の間の緊張関係は、この時期広くみられた。だがNRWのSPDの党内政治過程は、同州の特殊な事情や連邦レベルでの党内政策上の戦略的位置といった要因とあいまって、独特な様相を呈する。以下それを、87年連邦議会選挙後における党内状況、脱原発政策、党内自己改革の試みについてやや詳細に実証分析する。それにより、新たな問題状況への対応に際して緑の党との競合関係が常に圧力となっていたヘッセンとの違いが浮かび上がってくるだろう。

2. 実証分析

2.1. 新しい問題状況の発現——1987年連邦議会選挙後のNRW

87年1月25日の連邦議会選挙に際し、SPDは単独過半数獲得を目標にするが⁽⁹⁾、連邦では前回(83年)比1.2%減の37%と敗北を喫した。ただしNRWに限ってみると、前回比0.4%増の43.2%の得票で、前回比5.1%減で40.1%のキリスト教社会民主同盟(CDU)に対し再び優位に立った。ラオはこれを大きな成功と評した⁽¹⁰⁾。

注目されたのはラオの身の振り方である。ブランドの後継として連邦党首となるのか、州の政治に集中するのか。これは、NRWの利害を背景に、自らの主張をどこまで貫けるかという問題でもあった⁽¹¹⁾。彼は選挙翌日に早々と、党首に立候補しない旨言明する。

ラオは緑の党との連立には断固反対で、単独過半数獲得という目標もそこからの帰結である。だがNRWフォーマットの選挙キャンペーンを連邦にそのまま適用することは非現実的であり、SPD連邦事務総長ペーター・グロッツを中心とする連邦組織(ボン派)は、NRW州政治家(デュッセルドルフ派)の独走を牽制しつつ、党内統合に腐心した。だがラオの形勢が不利になる中でもデュッセルドルフ派は、連合問題で分裂状態にある連邦SPDを「赤い要塞」NRWのモデルに沿う方向で刷新すべく発言力の強化を目論んでいた⁽¹²⁾、選挙後も、同州では緑の党に対する明確な拒否的態度のゆえに得票の伸び悩みを最小限にとどめることができた、との解釈だった⁽¹³⁾。それだけに、ラオの党首への立候補の断念は、デュッセルドルフ派にとり、党内ヘゲモニー争いにおける失点である。緑の党との連立に積極的なラフォンテーヌを押しとどめることが、困難になったからである。

選挙後の対応をめぐる協議が行われていた2月始め、NRWのSPD幹部の発言が興味深い。ラオは、後継党首問題が短絡的に緑の党との連合問題に解消されるような議論に不満を表明し、SPDはむしろ自らの政策・綱領により自己規定されるべきだ、とした。その上で、地盤固めの必要性を強調する。党の組織基盤は選挙対策上も政策実現のためにも重要な前提条件であり、NRWでのSPDの成功はそれを裏書きする。

ラオの言葉には、左派の夢想家や偽りの予言者が党内で勢いを得ることへの懸念が見え隠れする⁽¹⁴⁾。とはいえ彼は、この間の状況変化を冷静に分析している。彼は、ハンブルクやミュンヘンといった大都市での得票減にふれつつ、この傾向がNRWの諸都市や第三次産業地帯に波及することに対し注意を喚起した。事実、ルール工業地帯でも緑の党の得票は7%に達しており、緑の党が議会入りを果たすならSPDの単独過半数は危なくなる。従って同州SPDの課題は、90年の次期州議会選挙に際し、自らの牙城において政権の座を守り抜くことであると結論づける。

また同州SPD副議長のクリストフ・ツェッペルは、彼らが追求するのは、連邦SPDへの対抗モデルを作ることではなく、党全体の統合の核となることだとする。ラフォンテーヌが新党首となることを是とする彼は、産業社会のエコロジック的刷新という目下の課題において、N

RWは指導的役割を演じるべき、という意見である。同州SPDがこのことを重要課題と位置づけるなら、緑の党との論争においても攻勢に出ることができる、と¹⁵⁾。

ここにみられる変化は看過されるべきでない。同州のSPDは、緑の党との連立へと傾斜を強める連邦党組織に距離を保ちつつも、緑の党の存在を念頭においた対応策を模索し始めた。緑の党への敵対感情に訴えるキャンペーンはもはや有効でなく、従来のSPDが苦手とした緑の党の政策領域で攻勢に出なければ、SPDの将来展望は開けない。

だがそれを、NRWの特殊な条件の中でどのように実現するのか。伝統的工業地帯の近代化という困難な政策課題が、同州SPDの前に姿を現したのである。

2.2. 脱原発をめぐる攻防——ボッフム党大会(87年10月)まで

NRWのエネルギー問題の出発点として留意すべきは、当地が石炭産業の中心地ということである。戦後ドイツでは石炭産業に対し手厚い保護措置がとられ、電力供給事業における国内炭利用を促進するような補助金行政が近年まで行われていた¹⁶⁾。鉱山・エネルギー労組(IGBE)に組織された炭鉱労働者は、SPDの強力な支持基盤だが、補助金依存の産業構造を背景にしばしば保守的傾向を示す。SPDの脱原発政策において、原子力に対する国内炭の優先使用原則が貫かれたのも¹⁷⁾、こうした事情と無関係でない。

変化の兆しもあった。象徴的なのは、レクリングハウゼン下級地区の党内人事である。18年間議長を務めたホルスト・ニッケマイヤーは、党内右派の代表的人物である。綱領論争には疎くもっぱら雇用機会の保全に関心が向きがちな当地のSPDで、左派や新社会運動には敵対的な態度をとってきた。その彼が87年夏、下級地区の新議長をめぐる決選投票で、左派の若手無名候補ベルンハルト・カスパーレクに敗れた¹⁸⁾。

こうした事情を背景に、ラオ首相以下の州政府閣僚は、9月8日、4原発の建設計画の撤回を決めた。これは、10月3、4日にボッフムで開催される同州党大会に向けての執行部議案を受けたもの¹⁹⁾。ここでは、Kalkarの高速増殖炉(SNR300)の操業許可が拒否されたものの、ハンのトリウム高温炉(THTR)や沸騰水型原子炉(ヴェルガッセン)については、安全審査や使用済み核燃料処理に問題がないならば操業を認めるとされた。

執行部議案は、「連邦議会でも連邦参議院でもSPDは過半数を得ていないという事実、また、連邦与党は安全で環境負荷の小さいエネルギー供給の拡張を望んでいないばかりかむしろ妨げているという事実にもかかわらず、NRWにおいて我々が、エネルギー政策の転換を放棄することにはならない」との基本認識を出発点に据える。「我々の認識によれば、SNR300には現行法に照らしても問題があることから、操業許可は与えられない。我々はプルトニウム経済への突入を拒否する」。

10年の撤退期限は達成不可能ではないとされる。そのためには、連邦原子力法の改正、新原発の建設・操業許可の拒否および核燃料再処理の禁止、プルトニウムの商業的利用の放棄、原発輸出の禁止、といった手順が必要である。その前提が目下のところ存在しない以上、州

政府はTHTRおよびヴェルガッセン沸騰水型原子炉に停止命令を出せない。同州SPDは、新エネルギー開発のための国家的研究プロジェクト、国内炭の優先的利用、省エネルギー、脱原発のための段階的計画、などを求める²⁹。

この執行部議案には、同州SPDの立場が如実に反映されている。連邦制構造の中で「法と秩序」に則って脱原発の可能性を追求することは、いかにも政権党らしい。とはいえチエルノブイリ以降の党内世論の変容の中で、SPDはもはや現実主義的エネルギー政策には回帰できない³⁰。州内すべての原発の即時停止を求める反対派の修正提案が予想された。

IGBEも原子力依存度の引き下げには賛成である。だが彼らの関心は国内炭の優先的使用原則の維持であり、CDU主導の連邦政府や他州政府から引き続き石炭産業への補助金を引き出すことである。その交渉は同年秋に予定されているが³¹、その際連邦政府は、石炭と原子力エネルギーの併存を補助金拠出の条件とする³²。従ってSPDが原子力問題において現実路線をとるほうがラオ首相にとり交渉条件はよくなる。しかも、90年の州議会選挙の対立候補にノルベルト・ブルムを擁立するというCDUからのゆさぶり³³を受け、石炭労組はラオ宛て書簡の中で、CDU候補への支持をちらつかせながら、SPDが反原発路線に固執すれば党は周辺的地位に追いやられかねない、と警告した。

9月下旬、連邦SPDとIGBEの板挟みとなったラオが、脱原発をめぐる矛盾ともとれる発言をし、分裂回避に苦慮する首相とCDUにからかわれた³⁴。また、経済相ライムート・ヨヒムゼンと州議会議員団長フリードヘルム・ファルスマンの見解の相違は、党内不和を引き起こした³⁵。その一方で、公営エネルギー供給事業体の自治体代表委員会には、今後は「ニュルンベルク党大会およびボップム党大会のエネルギー政策決議の内容を強力に主張する者のみ」が派遣される、との大会議案が用意された。これは、同種の委員会が事業体と地方自治体の癒着の温床になっているとの批判を受け、関係自治体のSPD政治家に対し、党のエネルギー政策に沿うかたちで規律の強化を求めたものである³⁶。

ヨヒムゼンとファルスマンの争いが長引く中、執行部議案をめぐる調整は前夜に至るまで続いた。こうして迎えた党大会当日、会場の外では緑の党や市民運動団体がTHTRの廃炉を求めてデモ行進し、屋内では炭鉱労働者が横断幕を掲げて待っていた³⁷。「ヨハネス、お前だけが頼りだ」。さまざまな利害関係や政治的駆け引きが交錯し、行方が注目された党大会だが、エネルギー問題をめぐる議論はあっけなく終わった。

「エネルギー政策の将来／原子力の代わりに石炭と近代技術を」と題された大会決議には、次の一節がある。「安全審査において重大な安全上の問題が確認された場合には、当該施設は閉鎖されるべきである。安全審査において重大で克服困難な安全上の問題が発見されず、かつ、使用済み核燃料処理に関する証明書が事業主より提示された場合には、現行原子力法の改正のためのSPDの努力が多数派形成をなし得ないという条件下では、操業許可ないしは操業再許可は拒否され得ない」³⁸。これは、脱原発を掲げながら実際には連邦原子力法のワク組みの中にとどまる、ということの確認に他ならない³⁹。SPDはそもそも原子力エネルギーに賛

成なのか、反対なのか。党大会決議の曖昧さに満足できない者は、コメントを付け足した。「我々の政治的立場としては即時撤退を求めるが、それはそのための多数派形成がなされてはじめて可能になる」(ファルスマン)⁹⁰⁾。このコメントじたい、党大会決議の矛盾した内容⁹¹⁾を物語る。環境大臣クラウス・マティーゼンが、潰し合い的な議論は終わりにしよう、観念論的な争いよりも石炭産業における3万の雇用機会のほうが重要だから、と呼びかけた時、大会代議員の心情に通じるものがあった⁹²⁾。

3票の反対と2票の保留を除き、約320名の代議員は執行部議案を支持した。また、311の有効票のうち299の賛成をもって、ラオが同州SPD党首に再任された。SPDの党大会が多様な利害関係を一見したところ見事に統合し、党内外に結束力を示す、というのはよくあることである。だがここで特徴的なのは、連邦野党の牙城という事情を背景に、批判の矛先が同州の経済危機の克服に非協力的な連邦政府へと誘導されたことである。ファルスマンは、必要とあらばデモの先頭に立って抗議の意思表示をする時が来た、と言った。これもまた、ラオ党首の下で同州SPDのアイデンティティを高めるのに寄与した⁹³⁾。執行部が警戒感を強めていたCDUの対立候補ブルムも、格好の標的となった。

連邦党首ハンス＝ヨッヘン・フォーゲルは、ボッフム党大会決議は、ニュルンベルク党大会路線を州レベルの実践の中で具体化したものだ、と歓迎の意を表明した⁹⁴⁾。そうだろうか。ニュルンベルク党大会決議を実践する際の難問が、これまでに明らかになっている。連邦制ドイツの政治構造の中で連邦政府が脱原発に消極的な場合、連邦野党主導の州政府にはどのような現実的可能性が残されているのか。ましてやNRWの特殊事情、すなわち斜陽化著しい石炭産業を抱え、それに対する補助金拠出の交換条件として原子力エネルギーへの支持を求められている中で、同州SPDにはどのような政策選択の余地があるのか。党大会はこれに対して明確な回答を示せず、問題を先送りしている。だとすれば、フォーゲル党首の言葉を社交辞令以上のものとして理解するには、無理がある。

2.3. 「近代化」へ向けての党改革 ― 90年代前半

党の自己改革への取り組みは、政策内容とともに組織機構・活動スタイルの側面からも評価される必要がある。

政策面での刷新の試みは、まずは89年11月の州党大会(ケルン)への執行部議案として結実した。これは、石炭・鉄鋼地帯にあっても顕著になってきた構造変化に際し、社会的責任の中で経済的・エコロジー的刷新の可能性を探るものである。多岐にわたる政策分野を網羅した議案を一読すれば、それへの言及は避けているものの、内容的には多くの点で「進歩90」に体现されたラフォンテーヌのコンセプトが見てとれる⁹⁵⁾。

97.7%の支持によるラオ党首の再任は、同州SPDにおける強い連続性志向を印象づける⁹⁷⁾。だが変化の予兆は見逃されるべきでない。新執行部は、19名のうち9名を女性が占め、年齢的にも若返りを見せた。ツェッペルは、執行部人事の大胆な刷新がイノベティブな変化を

もたらし、自己刷新へのシグナルとなることに期待を表明した³⁸。

だがそうした試みは、まもなく試練に直面する。1990年は統一ドイツ初の連邦議会選挙の年だが、NRWではそれに先立ち5月13日に州議会選挙がある。その候補者名簿順位をめぐり、年明け早々から紛糾があった。当初、候補者名簿の第二位にはファルスマンが予定されていたが、ツェッペルおよびリッター＝メルヒェス女史は、この順位には女性候補を据えることを求めた。これに激昂したファルスマンは、第二位が得られないなら立候補を辞退すると、自分の「指定席」に固執する態度を示した。この対立が執行部を越えて広がる中、形勢はファルスマンに有利となる。4地区のうち3つがファルスマンを支持し、州議会議員の多くもその趣旨のラオ宛て書簡に署名した。逆に党内左派と目されるツェッペルの行為には非難の調子が強まった³⁹。結局、ファルスマンを第二位にとどめる代わり、第三、四位を女性候補とするという妥協案（上位10人の男女比は4対6）が2月3日の代議員集会で可決された⁴⁰。

この背後には、党役職者や議員団における平等な男女比（クォーター制）を目標として定めた、88年のミュンスター党大会決議がある⁴¹。NRWのSPDにおける女性幹部（およびその賛同者）の要求は、これに沿うかたちで出てきた。小選挙区では他党候補との対抗上男性が有利になる現状の下、比例代表ではより多くの女性候補を当選圏内に確保する必要がある。だがそれが有力な男性政治家の既得権とかかわる場合には、すんなりとは進まない。今回のケースは、ラオ党首の後の「ナンバー・ツー」という象徴的地位をめぐる争いである。象徴にもかかわらず、いや象徴だからこそ、激しい争いに発展したのである。

クォーター原則の実現にあたって、（ブランドの）「息子」世代がなおも主導権を握る唯一の州⁴²であるNRWでは、とりわけ抵抗が大きいのかもしれない。その後の連邦議会選挙でも、同州SPDにおけるクォーター原則の実現にはなお道は遠かった⁴³。

断続的に行われていた政策面での刷新をめぐる論議は、連邦議会選挙後、再び注目を集める。12月16日、党執行部の若手グループが同州党事務総長ボド・ホムバッハの指導の下、「SPDの近代化」と題する16頁の中間報告書を発表する。同報告書は、社会民主主義や労働運動の古い諸課題はおおむね達成されたとの認識から、SPDは「もはやアクチュアルでなく、もはや誰も本気で望んではいないような古いイデオロギー的重荷から自由にならねばならない」とする。重要なのは、例えば市場経済をどう発展させるかといった具体的なテーマの中で知的にして公正な解決策を見つけることであり、モダンな国民的中道政党として多数派形成を可能にすることである。多様化著しい社会においてラオ首相の言う「理性の同盟」は、社会政策を求める者のためだけにあるのではなく、男と女、年配者と若者、近代化志向の者と伝統主義志向の者の間にも必要なのである⁴⁴。

連邦議会選挙戦において「ラフォンテーヌのプロフィールを補完し、各ターゲット・グループに照準を絞ってテーマ化するためのチーム・ワーク」が欠けていたことは、誤りだとされる。それは単なる選挙戦術批判にとどまらない。むしろ、ラフォンテーヌ路線への批判が、選挙敗北を機に一気に噴出した、とみるべきだろう。報告書は言う。SPDは数年来、環境税や

エコロジー改革のための複雑な議論を人々に要求してきたが、「党は野党の役割を演じている時にこそ、将来の政策目標についてよりよい構想を打ち上げることが望まれる」。グループのメンバーの中には、「ポスト1968年世代」の価値観は旧西ドイツでさえごく少数の人にしか支持されていない、と考える者もいる⁴⁹⁾。

この党内改革論議はどう評価されるべきだろうか。近代化の必要性への指摘は目新しいことではなく、プログラム論争に辟易する現実政治家が「イデオロギー」を捨ててことを求めるのも、SPD研究者なら飽きるほど見ている。総じて議論のレベルは高くなく⁴⁹⁾、追求すべき「近代化」の意味内容じたいが不明瞭である。この報告書は、ユーゾーなどの左派や、既得権の喪失を恐れる労働組合から批判されたが⁴⁹⁾、それ以上の反響は呼ばなかったようである。結論を先取りして言えば、ホムバッハは91年夏に同州事務総長の職を投げ出し、カスペルクおよびヴァイスケンがそれを引き継いだ⁴⁹⁾。

改革の必要性が認識されながら進展しない状況は、91年にも見られた。この年、ラオ党首の後継者問題が浮上する。78年以来同州首相を務めた彼は、今年60歳。そろそろ交代の時期では、との憶測はあった。それに拍車をかけたのが、連邦首相コールが、94年の連邦大統領選挙への出馬をラオに打診したことである。CDUの有力者ショイブレ内相(当時)がコール提案に理解を示すに及び、ラオ大統領の誕生は現実味を帯びてくる⁴⁹⁾。

これはSPDにとり穏やかでない。仮にラオが連邦大統領となるなら、NRWでは誰が党首・首相候補の座を引き継ぐのか。有力候補と目されるのは、環境大臣マティーゼンと官房長官ヴォルフガンク・クレメントで、他にシュロイサー蔵相などの名前も挙がっている⁵⁰⁾。だが、3度までも単独過半数をもたらし、党内的にも多様な利害関係を統合しうる人物は、ラオにおいて他にはいない。ラオが、彼とは必ずしも懇意でないツェッペルの執行部留任を求めたのは、後継者をめぐる党内抗争を回避するためと言われる。

同州SPDは危機的状態にあった。大統領職を意識するラオは失政を恐れるあまり、大胆な政治的決断を下せない⁵⁰⁾。若返り人事も閣僚にまでは及ばず、ファルスマンでさえ、「耐用年数に達した大臣のリスト」を公に示して物議をかもしほどだった⁵⁰⁾。彼が批判したのは年齢そのものではなく、新しいアクセントを打ち出そうとする気概に欠ける「システム・ラオ」の弱体化である⁵⁰⁾。ホムバッハやツェッペルといった若手の改革派がデュッセルドルフに距離を置くようになったのも、こうした閉塞状況と無関係でなからう。

こうした中で12月8日に行われた政権獲得25周年を祝う式典は、党外では冷ややかに受け止められた。野党は式典には参加せず、むしろこれを、SPD長期政権の無能力と癒着構造を批判する機会として利用した⁵⁴⁾。

その後の党大会に向け、焦点となったのは自治体改革である。同州の自治体の行政権限は、市長(名誉職)および市政指導官のふたりに分与されている。イギリス占領時代に創設されたこの制度は、その後、非効率的で時宜に合わないものとなった。ヘルベルト・シュノーア内相は、ふたつの職務の統合を柱とする改革案を示し、党内論議を提起した。

だが自治体政治家の間では、この改革に反対する者が少なくない。彼らは表向きは、市長に強大な権限が集中することを懸念するが、実際は自らの既得権の喪失を恐れているのである⁶⁸。そのため党大会議案には、自治体の政治的代表者である市長を強化する、という文言が残されただけだった⁶⁹。

州党大会は12月14、15日、ハーゲンにて開催された。予想されたようにシュノーア内相は代議員の支持を得られず、行政職のあり方を各自治体の判断に委ねるという妥協案も否決された。他に教育制度改革でも議論があったが、その決着は次期党大会に持ち越された。全般的に低調な党大会論議の中でも、ラオ党首が93%の高い支持で再任されたのは、例によって例のごとく。彼は、NRWこそが自分の居場所であり、「党がそれを望み自分の健康状態がそれを許すなら」、95年の次期州議会選挙に首相候補として再出馬する、と言った。しかし、連邦大統領とかかわる自身の身の振り方については、明言を避けた⁷⁰。

同州SPDの沈滞状況は、翌92年にも続いた。ラオは依然として態度をはっきりさせず、後継者問題をめぐる思惑が渦巻くばかりだった。そうした中で、執行部の指導力低下やSPD政治家の癒着構造ももはや覆い隠せないものとなった。政策面でも人事面でも、同党は政権担当者に求められる刷新をなし得なかった⁷¹。

変化の兆しが現れてきたのは、93年に入ってからのことである。3月、同州SPDは、自治体改革に関する方針を再検討すべく、電話によるアンケート調査を開始した。行政職の統合と市長公選制を柱とする改革案を一旦は否決したSPDだが、3月9日のヘッセン州地方自治体選挙での大敗北を受けて、批判的意見を真摯に受け止めざるを得なくなった。選挙民の80%が市長公選を望んでいる下で、野党が求める住民投票がもし行われるなら、SPDは市民の政治参加に敵対的とのそしりをまぬがれ得ない⁷²。

政策面の刷新では、「NRW2000プラス／ノルトライン＝ヴェストファーレンの未来のための対話」という行動プランが発表された。これは、「経済発展と雇用」、「住宅問題」、「移民政策」、「職業訓練と教育」など7つのテーマごとの討論集会で、それは同年秋から翌年の復活祭まで続けられる⁷³。特徴的なのは、斬新なシュミレーション技法の利用である。「エンピリカ」という民間調査機関に委託し、各問題領域ごとの将来展望を予測した「シナリオ」を作成させた。この企画の中心人物カスペルク事務総長は、ドイツ再統一以来の数々の問題はイデオロギーや出来合いの党綱領では解決できない、と言う⁷⁴。具体的問題をめぐる知的討論の成果は、95年州議会選挙のプログラムとなる。

8月、ラオがついに連邦大統領選挙に出馬する決意を固めると、彼の周辺は急に騒がしくなる。時あたかも8月27日に公表された世論調査は、ラオなしではSPDは単独過半数を維持できないことを示す⁷⁵。人気のある首相が単独政権の座を保証してくれた時代は過去のものとなりつつあった。今や同州SPDは、連邦大統領選挙の結果がどうであれ、ラオ以後の指導体制について真剣に考えねばならない。依然としてマティーゼン、クレメント、シュロイサーの3人が有力視される。だがこの人選が政治的方向性とかかわる選択とは思われていない⁷⁶。

団結、前例踏襲、信頼性が退屈なまでに徹底した同州SPDでは、型破りな行動で規律を乱すようなことは誰もしないのである。

9月、同州SPDは教育問題をテーマとする特別党大会で、新しい方針を打ち出す。同党はもはやゲザムト・シューレ（能力別コース制への対案として、高学年の生徒も共通の授業を受けるようにした学校制度）には固執せず、従来どおり新旧の教育システムが併存することとなった。これは同党が、両親の意向や、次年度に地方自治体選挙を控えた政治日程を配慮してプラグマティックにふるまったためである⁶⁴。10月に入ると「NRW2000プラス」がスタートするとともに、執行部では地方自治体改革を是とする内容の州党大会議案が可決された⁶⁵。党内改革の試みは少しずつ具体的なかたちをとり始めた。

94年1月15、16日、同州SPD党大会がビーレフェルトにて開催される。懸案の自治体改革は可決され、市長公選は99年から可能となった。折しも大会期間中に63歳の誕生日を迎えたラオは、代議員の99.4%の支持をもって党首に再任された。今さらこの数字に驚くことはないが、注目されるのは、クレメントが309票中244票という最高の支持率で執行部に選ばれたことである。これにより、ラオの後継候補としての彼の地位はゆるぎないものとなり、ライバルのマティーゼンを大きく引き離した⁶⁶。

3. 伝統的牙城における自己改革の特性とその限界性——むすびに代えて

政策内容であれ党の体制であれ、改革の必要性については党執行部は承知していた⁶⁷。だがそれを実行に移す段でさまざまな抵抗に直面したのは、NRWのSPDとて例外でなかった。支持基盤をなす圧力団体への気兼ねが政策転換の妨げになった例は、エネルギー政策に典型的にみられる。連邦政府の原子力政策への支持が石炭産業への補助金拠出の交換条件とされたため、脱原発の立場に徹することはできなかった。強力な石炭ロビーと影響力の弱い反原発勢力という力関係が、同州のエネルギー政策を強く規定したのである。

既得権への固執が改革を遅らせた例は、自治体改革やクォーター制の実現などにもみられる。これは、単独政権の下で硬直した官僚機構がともすれば癒着を生みやすい同州SPDでは、とりわけ深刻だったといえる。

ラオの人氣が党内改革を遅らせたのは、皮肉である。連邦大統領選との関連で、彼の後継者問題を真剣に考えねばならなくなった時、改革は少しずつ軌道に乗り始めた。

政策内容面ではどうか。「近代化」と銘打たれた90年連邦議会選挙後の改革プログラムから「NRW2000プラス」への流れを見ると、そこに際立ったプラグマティックな方向性を看取できる。同州の改革派はプログラム論争に辟易していたのだが、そこには永年の政権党としての自負、連邦に対する対抗意識が見てとれる。広範な動員を伴った討論シリーズの成果を次期州議会選挙のプログラムに反映させるというのも、いかにもNRWらしい。改革プログラムは当初、選挙戦マネージャーとして名を馳せたホムバッハの下で押し進められたが、彼が

中座した後を受けたのはカスペルクだった。彼は左派のように言われたこともあるが、一貫してプラグマティカーとしてふるまった。NRWでは、党内改革派は現状に対するラディカルな改革路線を志向するものではなかったのである。

NRWのSPDの改革は、あくまでも執行部主導の党内改革というかたちで進行した。これは、緑の党との緊張関係の下で党内左派がエコロジー的傾向を見せたヘッセンの場合とは対照的である。一般に左派はプログラム論議を好む傾向にあり、ヘッセンSPDの左派も自らの主張を党大会決議などに貫徹させる戦術をとった。しかしNRWでは、組閣に際していちいち連立パートナーと連合協定を取り交わす必要もなく、政府の政策や人事も党内的に処理できるため、綱領的文書を徹底して精密化するインセンティブは働きにくい。それよりもむしろプラグマティックな政策実践、ないしは選挙時の得票最大化戦術という性格が前面に押し出された。そのためもあってか、エコロジーというテーマは、NRWのSPDにあっては産業社会への根本的な問い直しとはならなかったのである。

同州はその後、大きな変化を経験した。94年に連邦大統領になる夢を果たせなかったラオは、翌95年の州議会選挙に首相候補として再出馬する。だがSPDの単独過半数はいよいよ不可能となり、冒頭に述べたように、赤緑連合か大連合かをめぐる激しい動揺の末、緑の党との連合路線が選択された。この間、かつての石炭・鉄鋼産業中心地は先端産業やサービス産業の立地となるなど、経済的な構造転換も進行していた。その後99年に大統領に選ばれたラオは、ベルリンへ移った。

NRWの赤緑連合はたびたび崩壊の危機を経験しながらも、穏健で安定した政権として定着した。だが、ラオの後を継いだクレメントがとりわけ強く新自由主義に傾斜した人物であることは、注目に値する⁶⁸⁾。

なぜNRWのSPDではエコロジー改革路線が根付かず、新自由主義的方向性を強めることになったのか。これは「赤と緑」の実験の評価の根幹にかかわる問いである。95年以降の党内政治過程の実証分析は、その理由を解明するひとつの手がかりを与えてくれると思われるが、これは別の機会に譲りたい。

註

- (1) *Der SPIEGEL* 1986/47(17. Nov.), S.20-24, “Sonst schaffen die Rechten den Durchmarsch”. など参照。
- (2) 各地区ごとのデータについては、党幹部による党員動向調査 (SPD-Parteivorstand: *Anlagen zum Abschlußbericht der Arbeitsgruppe “Mitgliederentwicklung”*, Bonn, 1995.) の他、同州が全国に先駆けて実施した支部組織の活動実態調査 (Horst Becker/Bodo Hombach: *Die SPD von innen: Bestandsaufnahme an der Basis der Partei: Auswertung und Interpretation empirischer Untersuchungen in der SPD Nordrhein-Westfalen*, Bonn, 1983.) などが有益。
- (3) 同州に限らず、SPDが単独過半数を得た場合、例外なく単独政権が成立している (小野一「『赤と緑』の実験の終わりと社会民主党」, 『一橋論叢』118-2(1997), 394頁)。86年に行われた、NRW州自治体の赤

- 緑関係に関するコンラート＝アデナウアー財団(CDU系)の調査も、同様の結果を確認している(Horst Kanits: *Das Verhältnis zwischen SPD und GRÜNEN auf kommunaler Ebene in Nordrhein-Westfalen*, Recklinghausen, 1988, S.34)。
- (4) FogtはNRW州緑の党を、左翼ラディカリズムの強い地方組織に分類する(Helmut Fogt: *Die Grünen in den Bundesländern: Das regionale Erscheinungsbild der Partei und ihrer Wählerschaft 1979-1988*. in: Dieter Oberndörfer/Karl Schmitt (Hrsg.): *Parteien und regionale politische Traditionen in der Bundesrepublik Deutschland*, Berlin, 1991, S.240)。
 - (5) Rainer Berger: SPD und Grüne im Ruhrgebiet. in: Rainer Bovermann/Stefan Goch/Heinz-Jürgen Priamus (Hrsg.): *Das Ruhrgebiet: Ein starkes Stück Nordrhein-Westfalen: Politik in der Region 1946-1996*, Essen, 1996, S.4.
 - (6) Udo Vorholt: Die Sozialdemokratie im Ruhrgebiet: Über den Wandel von politischen Milieus. in: Bovermann/Goch/Priamus (Hrsg.), a.a.O., S.170-172.
 - (7) Ursula Feist/Hans-Jürgen Hoffmann: Die nordrhein-westfälische Landtagswahl vom 14. Mai 1995: Rotgrün unter Modernisierungsdruck, in: *Zeitschrift für Parlamentsfragen*, 1996/2, S.258.
 - (8) Katrin Hater: *Gesellschaftliches Lernen im politischen Diskurs: Eine Fallstudie zum Diskurs über das Braunkohlentagebauvorhaben Garzweiler II*, Opladen, 2000.
 - (9) 小野一「1987年連邦議会選挙戦におけるドイツ社会民主党」,『工学院大学共通課程研究論叢』36-1 (1998)
 - (10) *Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ)*, am 27.1.1987, Nordrhein-Westfalen: “Bodenhaftung” der SPD bestätigt.
 - (11) フリードヘルム・ファルスマンはブランド党首の早期解任と連邦SPDの指導体制の刷新を求めた。*Frankfurter Rundschau (FR)*, am 27.1.1987, Seid nüchtern, Genossen, die nächste Personaldebatte naht, von Helmut Lölhöfel/Reinhard Voss.; *Süddeutsche Zeitung (SZ)*, 27.1.1987, Rau: An Rhein und Ruhr Erfolg gehabt.; *SZ*, 27.1.1987, Bei seinen Leuten bleibt Rau der Sieger, von Hans-Ulrich Jörges.
 - (12) *Der SPIEGEL*, 1987/4 (19.Jan.), SPD: Mehr als klug.
 - (13) *die tageszeitung (taz)*, am 27.1.1987, In NRW bleibt es beim Rau-Kurs.
 - (14) *FAZ*, am 6.2.1987, Rau meldet sich von der “Reise” zurück, von Lothar Bewerunge.
 - (15) *Westfälische Rundschau*, 7.2.1987, Rundschau-Gespräch mit Rau-Stellvertreter Zöpel: NRW-SPD muß Zentrum der Partei sein, von Bernd Kleffner.
 - (16) 1974年の法改正により導入された制度では、電力料金に上乗せされた賦課金(コール・ベニヒ)を元手に、石油や天然ガスに対してコスト高な石炭火力発電に対し補助金が支払われる。その後義務的消費量に関する規定が追加され、「1978年から1987年までの公営電力供給事業におけるドイツ炭使用に関する協定」が石炭業界と電力業界との間で締結された(Zoltán Jákli: *Vom Marshallplan zum Kohlepfennig: Grundrisse der Subventionspolitik in der Bundesrepublik Deutschland 1948-1982*, Opladen, 1990, S.279-283.)。
 - (17) SPDのエネルギー政策の暗黙の了解とも言うべきこの原則は、ニュルンベルク党大会の脱原発決議の中にもみられる。Vorstand der SPD: *Protokoll vom Parteitag der SPD in Nürnberg*, 25-29.8.1986, S.827.
 - (18) *Der SPIEGEL*, 1987/23 (1.Juni), SPD: Wie ein Monstranz.
 - (19) この議案は、脱原発をラディカルに志向するのではなく、ニュルンベルク党大会決議の実行可能性をためらいがちに再定義したものといえる(*Westfälische Rundschau*, am 9.9.1987, Leitantrag des SPD-Vorstands: Kernkraft-Ausstieg “nur Zug um Zug”). *SZ*, am 9.9.1987, Düsseldorf verzichtet auf geplante Atommeiler. も参照。
 - (20) *FR*, am 9.9.1987, Im Blickpunkt: Raus Ausstiegspläne, von Reinhard Voss.
 - (21) *SZ*, am 18.9.1987, Die SPD auf dem Rückweg zu energiepolitischem Realismus, von Hans-Ulrich Jörges.
 - (22) その交渉の見通しおよびコメントは, *FR*, am 9.10.1987, Jahrhundertvertrag gerät ernsthaft ins Wanken.; *FAZ*, am 9.10.1987, Teure Kohle.

- (23) *FR*, am 9.9.1987, a.a.O. ; *SZ* 18.9.1987, a.a.O.
- (24) SPDは、CDUが同州で初めて連邦政治の要人を対立候補として送り込んできたとして警戒感を強め、伝統的政策分野での体系的強化や党組織の基礎固めの必要性をよびかけた。特に、IGBEの機関紙が「ブルムのチャンスは小さくない」と言明したことは、そうした警戒感をよりいっそう強めることとなった。(FAZ, am 5.8.1987, Die SPD in Düsseldorf ist beunruhigt wegen Blüm, von Lothar Bewerunge.). *SZ*, am 9.6.1987, Blüms Wahl löst Alarm in der Ruhrgebiet-SPD aus. も参照。
- (25) *Stuttgarter Zeitung*, am 25.9.1987, Johannes Rau zwischen Kohle und Kernenergie, von Jürgen Zurheide.; *FAZ*, am 9.9.1987, Rau will einen differenzierten Kurs der SPD in der Kernenergie-Politik も参照。
- (26) 原子力エネルギーは移行期においては容認される、とのヨヒムゼンの見解に批判的なファルスマンは、具体的な撤退シナリオの提示を求めた。労働・社会大臣のヘルマン・ハイネマンは、そもそもニュルンベルク党大会決議に定められた撤退期限の始まりが86年なのか、原子力法の改正が実現された時点なのかが明確でないとして、ヨヒムゼンを支持する立場をとった。(Westfälische Rundschau, am 29.9.1987, Kernenergie-Debatte in der NRW-SPD, von Bernd Kleffner. ; *SZ*, am 29.9.1987, Streit über Weg aus der Kernenergie.)
- (27) *FR*, am 26.9.1987, SPD nimmt “Strom-Männer” an die Kandare, von Leonhard Spielhofer.
- (28) 彼らのお目当ては、IGBE議長ハイツン＝ヴェルナー・マイヤーの党大会演説だった。同演説は組合機関紙に掲載(*Einheit*, 1987/20 (15.Okt.)), SPD-Landesparteitag in Bochum bereit über die Energiepolitik : Kohle braucht jetzt Unterstützung.)。
- (29) *Handelsblatt*, am 5.10.1987, Ein vom Recht eingeschränktes Plädoyer für die Abschaltung aller Atom-Anlagen. エネルギー決議の抜粋は *Vorwärts*, 1987/41 (10.Okt.) にも掲載。
- (30) *Westfälische Rundschau*, am 5.10.1987, “Kumpel von der Ruhr” mahnten Regierungschef Rau, von Bernd Kleffner. 党大会翌日の新聞各紙がおおむねこのような論調を示す中で、『フランクフルター・アルゲマイネ』紙の報道はかなり違った印象を与える(FAZ, am 5.10.1987, Nordrhein-Westfalen Künftig ohne Atomstrom?)。
- (31) *FR*, am 5.10.1987, Gebrauchsanweisungen für verwirrende Widersprüche, von Helmut Löhlhöffle.
- (32) 脱原発決議の信憑性や実行可能性についての批判的コメントは、*taz*, am 5.10.1987, Energieprofil gezeigt : Graubwürdigkeitstest für die NRW-SPD steht noch aus, von Walter Jakobs.; *Stuttgarter Zeitung*, am 8.10.1987, Atomkraft — nein, aber, von Leonhard Spielhofer.
- (33) *Westfälische Rundschau*, am 5.10.1987, a.a.O. 同じ報道は、エネルギー問題での協調的態度の安全弁となったのが外国人選挙権だとする。党大会は激しい議論の後、「可及的速やかに」それを実現することを決議した。
- (34) *Handelsblatt*, am 5.10.1987, a.a.O. ; *FAZ*, am 5.10.1987, a.a.O.
- (35) *FAZ*, am 5.10.1987, a.a.O.
- (36) *SZ*, am 17.11.1989, Die SPD Nordrhein-Westfalens vor dem Landesparteitag, von Michael Birnbaum.
- (37) 「ほとんど君主制的」と評した新聞報道もある。*taz*, am 20.11.1989, Die NRW-SPD auf klar monarchistischem Kurs, von Walter Jakobs.
- (38) *Westfälische Rundschau*, am 27.11.1989, Im neuen 19köpfigen SPD-Landesvorstand sind neun Mitglieder Genossinnen — Generation um 40 Jahre, von Bernd Kleffner.
- (39) *Rheinische Post*, am 19.1.1990, Farthmann empört über Parteifreunde. ; *Westdeutsche Allgemeine (WAZ)*, am 23.1.1990, SPD-Bezirke und Abgeordnete stärken Farthmann den Rücken.
- (40) *WAZ*, am 25.1.1990, SPD-Quotenbeschuß setzt Frauen unter Erfolgszwang, von Ulrich Horn. ; *SZ*, am 5.2.1990, Rau warnt vor Nationalismus.
- (41) いずれかの性が40%を下回ってはならない。この原則は、党役職者においては94年までに、議員団では98年までに達成が求められる(Peter Lösche/Franz Walter : *Die SPD : Klassenpartei — Volkspartei — Quotenpartei*. Darmstadt, 1992, S.256.)。クォーター原則をめぐる党大会論議は、*Protokoll vom Parteitag der SPD in Münster*, 30.8.-2.9.1998, S.90-128.

- (42) SZ, am 8.2.1990, Sozialdemokraten in Nordrhein-Westfalen vor dem Generationswechsel, von Michael Birnbaum.
- (43) FR, am 14.9.1990, Frauen zürnen den Genossen, von Reinhard Voss.
- (44) SZ, am 17.12.1990, Nordrhein-Westfälische Sozialdemokraten zur Lage ihrer Partei, von Michael Birnbaum. ; *Westfälische Rundschau*, am 17.12.1990, Vorstand bereitet Grundsatzpapier, von Bernd Kleffner. 『フランクフルター・ルントschau』紙は同時に発表されたフローリアン・ゲルスター(ラインヘッセン地区議長, ゼーハイマー・クライス)の論文にも言及するが, 彼の立場は「近代化」論者のそれとは明らかに異なっている(FR, am 17.12.1990, Sozialdemokraten empfehlen SPD den Verzicht auf Lebenslügen, von Helmut Löhlhöfel.)。
- (45) *Neue Ruhr Zeitung (NRZ)*, am 17.12.1990, SPD soll nach der Wahl Altlasten über Bord werfen, von Horst-Werner Hartelt.
- (46) 当たり前すぎて役に立たない結論, とある新聞報道は評した(SZ, am 17.12.1990, Jetzt ist der Mut zur Integration gefragt, von Martin Süskind.)
- (47) *Bonner Rundschau*, am 21.12.1990, NRW-Jusos: Die alten Ziele sind längst noch nicht erreicht, von Peter Weigert. ; FR, am 4.1.1991, Papier zur “Modernisierung der SPD” ist unmodern, von Ralf Krämer. ; WAZ, am 22.1.1991, SPD-Linke attackieren “Modernisten”, von Ulrich Horn. 『古い重荷』が具体的には何を意味するのかは, 報告書は言及を避けているが, その意図するところは同州ユーゾー議長クレーマーには明らかである。『社会主義からの決別だ。』……彼が憂慮するのは, 左派の一部がこの報告書作成に関与したことである。』(taz, am 4.2.1991, Abschied von alten Lebenslügen der SPD, von Walter Jakobs.)
- (48) *Westfälische Rundschau*, am 29.8.1991, Rau schlägt Hombach-Nachfolger vor, von Bernd Kleffner. ; FR, am 9.12.1991, Filzdebatten, Filzpantoffeln, von Reinhard Voss.
- (49) FAZ, am 29.5.1991, Verboten eines Machtwechsels, von Albert Schäffer.
- (50) マティーゼンは将来的にはラオの後継となることを自覚していたようだが, 出身地のシュレスヴィヒ=ホルシュタイン州で2度首相候補として敗れたという負の経歴を持つ。ジャーナリスト出身のクレメントは, やり手の行政官としてラオの側近の間で急速に影響力を強めてきたが, 彼の党内支持基盤は必ずしも強固ではない。政治的方向性を異にする両者は, 激しいライバル関係にある。*Stungarter Zeitung*, am 2.1.1991, Schon wird über Johannes Raus Nachfolger spekuliert, von Jürgen Zurheide. ; FAZ, am 29.5.1991, a.a.O. ; FR, am 1.11.1991, Der Landes-Übervater und die klirrenden Kaffeetassen, von Reinhard Voss. ; *Der SPIEGEL*, 1991/43 (21.Okt.) , Wie in Montevideo.
- (51) *Der SPIEGEL*, 1991/43 (21.Okt.) , a.a.O.
- (52) *Stuttgarter Zeitung*, am 16.11.1991, Raus Wechselpläne stürzen SPD in Formkrise, von Jürgen Zurheide. ; *Westfälische Rundschau*, am 1.11.1991, Parteigeschäftsführer ; “Es ist völlig verfehlt, die SPD krank zu reden”.
- (53) SZ, am 6.12.1991, Ohne Schwung um die Wette laufen, von Michael Birnbaum.
- (54) FR, am 9.12.1991, a.a.O. (注48) , von Reinhard Voss. ; taz, am 9.12.1991, Pils und Filz beim Jubiläum, von Walter Jakobs. ; *Der SPIEGEL*, 1991/50 (9.Dez.),
- (55) *Stuttgarter Zeitung*, am 14.12.1991, Rau läßt Schnoor im Regen stehen, von Jürgen Zurheide.
- (56) FAZ, am 12.12.1991, Kosmetische Korrekturen statt eines großen Reformwerks, von Albert Schäffer.
- (57) FR, am 16.12.1991, Der befreiende Satz fehlte, von Reinhard Voss. ; *Handelsblatt*, am 16.12.1991, Nordrhein-Westfalen: Eindrucksvolle Mehrheit bei der Wiederwahl Raus zum SPD-Landesvorsitzenden. ; *Rheinische Post*, am 16.12.1991, SPD-Parteitag lehnt Schnoors Gemeindereform ab, von Detlev Hüwel.
- (58) FAZ, am 21.9.1992, Auf abschüssiger Bahn, von Albert Schäffer. 「ホムバッハが党事務総長職を辞して以来, 州の党組織は事実上存在しないに等しい。」(SZ, am 21.9.1992, Unübersehbare Symptome der Schwäche, von Michael Birnbaum.)
- (59) NRZ, am 10.3.1993, Besorgte NRW-SPD startet Telefon-Aktion, von Horst-Werner Hartelt. ; WAZ, am 13.3.1993, Die Diskussion um Doppelspitze erhält neuen Auftrieb, von Ulrich Horn.

- (60) *General-Anzeiger*, am 29.4.1993, Die SPD auf der Suche nach NRW-2000, von Jürgen Zurheide. ; *Welt am Sonntag*, am 2.5.1993, Rau ruft “helle Köpfe” zur SPD. ; *WAZ*, am 21.10.1993, SPD sucht Gespräch mit den Bürgern. 党発行のプロジェクト企画書は, NRW 2000plus : der Zukunftsdialog für Ndrhein-Westfalen.
- (61) カスベルクへのインタビューは, *General-Anzeiger*, am 20.5.1993, “Das Projekt wird frischen Wind in die Partei bringen”. 「SPDはプログラム政党からシナリオ政党へ変貌した」との大きなコメントもある(*FAZ*, am 3.5.1993, Mit “2000plus” zur Szenarienpartei.)。
- (62) *Westfälische Rundschau*, am 28.8.1993, Ohne Rau nur 43% für NRW-SPD. ; *Der SPIEGEL*, 1993/35 (30.Aug.), Gemetzel der Rivalen.
- (63) *SZ*, am 28.8.1993, Gibt es für die nordrhein-westfälische SPD ein Leben nach Johannes Rau?, von Jürgen Kahl.
- (64) *SZ*, am 20.9.1993, Abkehr von der Gesamtschle. ; *NRZ*, am 20.9.1993, Nur Farthmann reizt beim Parteitag zum Widerspruch, von Alexander Gallrein.
- (65) *NRZ*, am 28.10.1993, SPD-Spitze: Grünes Licht für Urwahl, von Theo Schumacher.
- (66) *FAZ*, am 17.1.1994, Rau mit 99,4 Prozent der Stimmen im Amt bestätigt. ; *taz*, am 17.1.1994, Die Partei liegt Rau zu Füßen, von Walter Jakobs. 党大会がラオの個人的な関心事と一体化してしまうような運営への批判的コメントは, *SZ*, am 17.1.1994, Johannes Raus persönliches Fest.
- (67) 同州SPDの全国に先駆けた改革イニシアチブは, Becker/Hombach, a.a.O. (注2), Ernst-Martin Walsken/ Ulrich Wehrhöfer (Hrsg.): *Mitgliederpartei im Wandel : Veränderungen am Beispiel der NRW-SPD*, Münster, 1998. などにも伺える。
- (68) 環境問題研究者のラインハルト・ロスケは, ふたりのSPD内モダナイザー(シュレーダーとクレメント)の環境政策上の立場を批判的にコメントする(*FR* am 29.7.1997, S10, Die Wirtschaftsmänner : der Zukunft zugewandt?). 今日のSPDの党内勢力関係を考える上で, 西田慎「シュレーダー社会民主党のジレンマ/その党内対立の歴史的位相と現状」(『ドイツ研究』31号(2000))のモデルも参考になる。

(おの はじめ 本学専任講師)